

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520774

研究課題名(和文)天聖令を使用した大宝令独自性の研究

研究課題名(英文)A study of uniqueness in Taiho Statutes based on the T'ien-sheng Statutes

研究代表者

服部 一隆(HATTORI, Kazutaka)

明治大学・文学部・その他

研究者番号：20440175

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：中国において新たに発見された天聖令を使用することによって、日本古代国家の基本法であった大宝令の独自性研究を実施し、以下の成果があった。

天聖令残存編目の検討によって、大宝令における独自性作成方法が明らかになった。戸令・田令・賦役令の検討によれば、大宝令は7世紀の実態に合わせて作成されている。田令に規定された地割(町)についての7・8世紀における意義が明らかになった。天聖令文献目録および弘仁格データの作成。

研究成果の概要(英文)：The T'ien-sheng Statutes(T'ien-sheng ling) newly discovered in China is used and the Taiho Statutes(Taiho-ryo)which is an organic act of Japan is studied its uniqueness. There were the following results.

,Examination of surviving chapters in the T'ien-sheng Statutes proves that a method for making uniqueness in Taiho Statutes. ,Examination of the Statutes on Households(hu ling / ko-ryo),Arable Land(t'ien ling / den-ryo)and Taxation in Goods and Labor(fu-i ling / buyaku-ryo) proves that Taiho Statutes adjusts actual situation in 7th century. ,The actual situation and its meaning of a Land division provided in Arable Land(cho) become clear in 7th and 8th century. ,The making of the T'ien-sheng Statutes bibliography and the konin Regulation data.

研究分野：日本古代における土地制度および日唐律令制の研究

キーワード：日本史 律令 大宝令 天聖令 唐令

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本の古代国家は律令を基本法とする律令国家とされる。その起点は大宝令(701年成立)であるが、現存しないため養老令(718年成立)によってその内容が推定されてきた。しかし大宝令が手本とした中国の唐令も現存しないため、その復原は非常に困難であった。ところが中国において天聖令(1032年施行)が新たに発見され、高精度の唐令復原が可能となった。ここから養老令のほぼ全条に対応する天聖令文の存在が確認されたことにより、日本令は概ね唐令に依拠していることが明らかとなった。

(2) 代表者は天聖令の公表からまもなく、田令を題材とした研究を開始し、「天聖令を使用した大宝令の復原研究」という研究課題で平成21年度科学研究費(若手研究(B))に採択された。ここでは日唐令類似面の比較検討によって、唐令の体系的継受は大宝令段階であることを証明し、さらには大宝令画期説による班田制研究を進めた。その成果の一部をまとめ、『班田収授法の復原的研究』という博士論文を執筆した。

2. 研究の目的

(1) 上記では、日唐令の類似面を比較することによって、大宝令の編纂方針を明らかにしてきたが、次に必要なのは大宝令に規定された唐令にない独自性の研究である。そこで本研究では天聖令を使用した日唐令比較によって大宝令の独自性を解明し、7・8世紀史の展開の中でその歴史的意義を明らかにする。なぜなら大宝令には中国の制度を先取りした部分と、実態に合わせた部分があるとされ(吉田孝『律令国家と古代の社会』)、田令でいえば大化改新詔から墾田永年私財法あたりまでの時間幅を持たせなければ歴史的意義が明確にならないからである。そのモデルケースとして、独自規定が多く日唐令比較の効率が最も高い、戸令・田令・賦役令を中心に検討する。

(2) 田令・賦役令の2編目は、天聖令が存在するため精度の高い大宝令の復原が可能であり、列島支配の実態を踏まえて立法されている可能性が高いため、検討の意義が大きい。また戸令は田令・賦役令の検討により想定することが可能となる。これらの実施については出土文字資料と律令公文(戸籍・計帳・田籍・田図など)との比較によって検証する。その他の編目については、独自条文や独自部分に着目した分析および編目を横断した分析を行う。

3. 研究の方法

(1) 基礎データ作成、天聖令残存編目分析、大宝令の独自性解明、という3段階で進める。第1段階では、(a)日唐令比較研究として、唐令復原史料と日唐令関連文献の

収集、(b)日本史料研究として、大宝令に関する単行法令と一次史料の収集をそれぞれ実施し、大宝令逸文データと併せて条文ごとの検索が可能な日唐令比較データベースを作成する。第2段階では、天聖令残存編目の日唐令比較を行い、大宝令における独自部分を3種類に分類して明確化する。田令・賦役令については編目全体の検討および大宝令の復原を実施する。第3段階では、天聖令が残存しない編目のモデルケースとして戸令の大宝令復原を実施し、その他の編目も併せて大宝令の独自性を明らかにする。以上を7・8世紀における単行法令および出土文字資料の中に位置づけ、その歴史的意義について明らかにする。

4. 研究成果

(1) 研究データ

【日中天聖令研究文献目録】当初の計画には無かったが、中国社会科学院歴史研究所との提携により作成した。現在2012年から2015年のものが完成しており、とくに中国の研究文献については多くの知見を得ることができた。また中国でも日本の文献目録は活用されている。5年計画なので、今年度中に公開予定である。

【天聖令・大宝令文献データ】国内文献はほぼ収集済みであり、PDF化が終了している。

ただし、想像以上に中国文献が増加したため、条文ごとのデータベースは今後の課題とし、上記文献目録に代えることとした。

【単行法令資料データ】国立歴史民俗博物館において作成したものを修正し、弘仁格抄の校訂などを加えた原稿を作成中である。現在刊行準備を進めている。

当初計画していた一次史料のデータベースは本データに代えることとする。

(2) 田令研究

【班田収授法の復原的研究(2012)】近年発見された北宋天聖令と比較検証することによって、欠失した大宝令文を復原し、公地公民制に基づいた土地国有制度という旧説の枠組みを批判し、唐令継受の実態や班田制の特質を解明する。班田収授法は大宝令において制定され、在地首長による土地支配から、国家的土地支配が成立するまでの過渡的制度であったと位置づける。

多くの学会誌に書評が掲載され、話題となった。

【班田収授法と条里地割の形成(2016)】班田収授法からみた条里地割の形成について、以下のことを論じた。7世紀に畿内近辺に存在した一辺109mの方格地割は「条里地割」でなく「町」と呼ぶべきであり、班田制は「町」地割を念頭においているが、必ずしも地割を必要としない条里以前の制度である。「町」の位置を特定する機能が条里である。条里の前提には班田図による土地管理があり、天平元年班田が画期となっている、

条里には班田図が必要なことから、地方における文書行政の進展が必要であり、その条件は8世紀前半から中頃の国庁の成立によって満たされるとした。研究計画にあるように、大宝令を7・8世紀における単行法令および出土文字資料の中に位置づけ、その歴史的意義について明らかにしたものである。

条里制・古代都市研究会大会にて報告した際には、画期的との評価も受けた。条里は中国では確認されていない日本独自の制度であり、今後の研究課題である。

(3) 賦役令研究

【調庸布と記銘(2013)】【調庸布墨書銘からみた貢納制度(2013)】調庸布に記載された戸主や個人名の墨書には、勘検や貢納表示などの合理的な目的があるのではなく、律令遵守のために記載されたとする。律令の人頭税は法形式上のものであり、実際は共同労働で生産されたとする。

7世紀の貢納制度が賦役令のなかに取り入れられというのは本科研の研究によって得られた視角である。なお、本研究は、科学研究費補助金(基盤研究(C))「文字瓦データベース構築と文字瓦の生産からみた地域社会の研究」(研究代表者:山路直充)の報告書として刊行予定であったが、図書として刊行することとなり、現在編集作業中である。

(4) 戸令研究

【古代における「村」研究の整理 文献史学を中心に (2015)】日本古代における文献史学を中心とした「村」研究を整理する。日唐令の比較研究、村落と開墾、里(郷)と領域、村と領域の研究を整理し、「村」の表記がなぜ使用されるようになったのか、地名との関連を論じる。

【古代における国郡里と村(2015)】古代集落研究の前提として、里(郷)・村について検討する。大宝令以前は余戸がないため1里の戸数は必ずしも50戸ではなかった。大宝令の施行によって厳密な50戸1里制が開始され、郷里制によって1郡1余戸という制度が始まる。大宝令によって国司による地方支配が強化されたときに、里で表せない地点・領域などを「村」という文字で表記することが始まった。本報告は図書として刊行予定であるため、現在編集作業中である。

「村」研究は、用字の帰納法的検討がなされているが、大宝令施行に際して必要になったとする視点は本科研の検討によって得られたものである。

(5) 編目横断研究

【大宝令復原に関する諸問題(2014)】大宝令の研究史を整理し、その復原方法について論じる。編目別の大宝令復原研究は養老令との相違から日唐律令比較および復原の確度表記を工夫するように変化する。養老令文の混入を排除するため、現状では確実な大宝令逸

文と天聖令による日唐令比較を組み合わせた大宝令復原が必要であるとする。

【日唐令の比較と大宝令(2014)】天聖令が残存している編目について大宝令を含めた日唐令比較を実施し、初歩的な検討を加え以下のことを論じた。天聖令・養老令・大宝令が同一である条文について、天聖令と養老令が同一の場合、永徽令・開元令・天聖令・大宝令・養老令が全て同一である可能性が高いが、永徽から開元への変化も考慮する必要がある。大宝令と養老令が同一の場合、永徽令を大宝令で継受して以後変化がない可能性が高いということ。大宝令と養老令が相違する点について検討し、大宝令と養老令が相違する場合、全体としてみれば唐令と大宝令が同文で、養老令が異なる場合が多い、これは大宝令が唐令を引き写し、養老令が修正を加えたものと見ることができ、田令における日唐令比較の傾向と共通していること。養老令の独自条文について、成立したのは概ね大宝令段階とみてよい。各編目の末尾やあるまじりの最後に位置するものが多いが、配置の意図が不明なものあり、検討の必要がある。さらに養老令との対応が明確でない天聖令(復原唐令)がある場合、永徽令には存在したのか、格などにあったのか、他編目にあったのか検討の必要がある。

本科研によって作成したデータを活用した基礎的研究であり、他には類をみないものである。

【大宝令復原の方法について(2014)】大宝令は日本古代国家の起点となる重要な法典であるが、現在失われている。これまで多くの復原がなされてきたが、根拠となる史料が少ないという限界があった。報告者は北宋天聖令を使用した大宝令の復原を実施してきたが、近年その方法についての批判もなされている。本報告では大宝令の復原方法を整理し、その再検討を試みた。

本研究の方針について再確認することができた。

【大宝令にみえる公民制の日本独自規定について 戸令・田令・賦役令の冒頭条文を中心として (2016)】【戸令・田令・賦役令の冒頭条文について(2016)】日本古代の公民制は、主に戸令・田令・賦役令に規定されている。これらの冒頭条文数箇条を題材として、日本の独自規定を大宝令に取り入れた方法を検討する。本科研で計画した戸令・田令・賦役令を横断した研究である。7世紀の出土文字によって確認されている賦役令・戸令には日本独自の要素が多く、田令には少ないということが確認された。

本科研の見通しどおりの結果が得られ、今後研究を継続する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

服部 一隆、班田収授法と条里地割の形成、
条里制・古代都市研究、査読無、31号、2016、
15-34

服部 一隆、日唐令の比較と大宝令、唐代
史研究、査読無、17号、2014、94-115

〔学会発表〕(計9件)

服部 一隆、大宝令にみえる公民制の日本
独自規定について 戸令・田令・賦役令の冒
頭条文を中心として、千葉歴史学会大会、
2016年5月22日、千葉大学(千葉県千葉市)

服部 一隆、戸令・田令・賦役令の冒頭条
文について、千葉歴史学会古代史部会
2016年3月12日、千葉中央コミュニティセ
ンター(千葉県千葉市)

服部 一隆、古代における国郡里と村、第3
回古代武蔵国シンポジウム(古代武蔵国研究
会・明治大学日本古代学研究所)、2015年11
月15日、明治大学駿河台校舎(東京都千代
田区)

服部 一隆、古代における「村」研究の整
理 文献史学を中心に、千葉歴史学会古代
史部会・房総古代史研究会合同例会、2015年
7月25日、千葉中央コミュニティセンター(千
葉県千葉市)

服部 一隆、班田収授法と条里地割の形成、
第31回条里制・古代都市研究会大会、2015
年3月7日、平城宮跡資料館(奈良県奈良市)

服部 一隆、宮原武夫著『古代東国の調庸
と農民』(岩田書院2014年)書評 調庸と班
田を中心として、千葉歴史学会古代史部
会・房総古代学研究会合同例会、2014年12
月20日、千葉中央コミュニティセンター(千
葉県千葉市)

服部 一隆、大宝令復原の方法について、
歴史学研究会日本古代史部会、2014年10月
18日、歴史学研究会日本古代史部会、専修大
学神田校舎(東京都千代田区)

服部 一隆、調庸布墨書銘からみた貢納制
度、千葉歴史学会古代史部会・房総古代史研
究会合同例会、2013年12月21日、千葉中央
コミュニティセンター(千葉県千葉市)

服部 一隆、調庸布と記銘、公開シンポジ
ウム「日本古代の生産と記銘」、2013年6月
9日、明治大学駿河台校舎(東京都千代田区)

〔図書〕(計2件)

服部 一隆ほか23名、塙書房、2014、日本
古代の国家と王権・社会(担当：大宝令復原
に関する諸問題)、159-178

服部 一隆、吉川弘文館、班田収授法の復
原的研究、2012、296

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

服部 一隆(HATTORI, Kazutaka)

明治大学・文学部・兼任講師

研究者番号：20440175

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：